

「心を美しく磨く」

いきなりトイレの話で申し訳ありませんが、ちょうど二年前に「トイレの神様」という歌がはやり、大きな話題になったことを覚えていますか。植村花菜さんが作詞作曲された歌で、10分近い大変長いその曲の中に「トイレにはキレイな女神様がいて、トイレをキレイに掃除するとべっぴんさんになれる」と言うおばあちゃんの話が出ていました。彼女の亡くなったおばあちゃんとの思い出の中で、感謝の気持ちを込めた大切な話として歌われていました。

この歌を聴いていて感じたことがあります。ここでおばあさんの言いたかったことは、単に「汚れる場所こそきれいにしなさい」ということだけでしょうか。もっともっと大切な思いが、そして願いが私はこの中に込められていると思いました。

その一つは「心が磨かれる」ことだと思います。人はいつも生活している環境に心が親しみ、変化を嫌って徐々に慣れ合っていきます。トイレが汚いままだと、いつも見ている汚い状態に心まで感化されて、そのことに鈍感になり気にしなくなります。まして汚れたトイレを掃除することは、できるだけ避けたいと当然思ってしまう。

しかし、トイレの汚れと真剣に向き合って掃除することで、汚れがとれて美しくなったトイレは、すばらしいご褒美をくれます。トイレ掃除が日常となり、以前までの日常を超えた新しい価値観の日常が体験できること。その体験の中から、自分の心に真摯に向き合う気持ちが芽生え、気づかせ、心が整理されてキレイになることです。人としての心を磨き整えることで、心がべっぴんさんになれるのです。

二つ目は「心配りをする」ことです。誰もが使うトイレを、心を込めてきれいにすることは、特別なことではなく当たり前のことです。当たり前のことを、当たり前にできることが重要です。身近なことや周囲の人に気を配ることのできる人は、相手の気持ちや人の心の在りようが分かります。そして相手の気持ちを尊重して関わり合えることで、お互いに助けあい支えあって、人はどんどん成長していけるのだと思います。人と人とのつながりの大切さを教えていると感じました。

このおばあさんは自分の経験から、人としての大切な生き方を凝縮させて、トイレには神様がいてと象徴的に言ったのではないのでしょうか。トイレ掃除ができるかできないかの問題ではなく、やるかやらないかが重要であり、さらには「やらされる」から「やる」という意識を自ら持つことで、自分の身に付いてくるものが全く違ってきます。トイレを磨くことは自分の心を磨くこと、そして心を美しくすること。そんなメッセージを強く感じました。

東高生の皆さん、君たちのこれからの人生は自己責任や自己管理が強く求められ、自分の価値観が問われます。自分の心に人としての美学を、美学につながる価値観を是非持ってください。希望に満ちた大いなる前途を大切にすると共に、自分の心を美しく磨いて、素敵な大人になっていただきたいと切に願っています。

平成24年1月25日

大垣東高等学校長 浅野 裕司

